

# 第2世代以降の移民の生活世界から「帰還」、 「故郷」を再考する

文  
奈倉京子

共同研究【若手】 ● 帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界（2011-2013）



華僑農場のベトナム帰国華僑が行う「打齋」と呼ばれる宗教実践。この実践を籍貫（父方祖先の出身地）の広西（防城、欽州、北海など）から北ベトナムへ持ち込み、帰国の時に持ち帰ってきた。当事者たちの「打齋」に対する理解は曖昧で、ある人は仏教の習慣だといひ、ある人は道教や茅山教（道教の一派）だといひ（2005年、広東台山海宴華僑農場にて、奈倉京子撮影）。

本共同研究は、2011年10月からスタートし、同年11月12日に第1回目の研究会を開催したところである。以下、第1回目の研究会（趣旨説明、問題提起）の内容を基に、本共同研究の趣旨および今後の見通しについて述べていきたい。

## 「帰還移民」とは誰か？：当事者による「帰還」の意味づけ

本研究の目的は、「帰還移民」の生活世界について比較民族誌的に考察をし、「帰還」や「故郷」の概念を通文化的に検討し、概念の再検討を行うことである。同時に「帰還移民」の生活世界について実証的に検証していく。

一般的に帰還といった場合、同一人物の往還を意味する。移民について言えば、ある人が母国から移住先国へ行き、移住先国から母国へ戻ることを指す、つまり1世代限りの出身国への帰国である。しかし、移住先国で生まれ育ち、未だ見ぬ「母国」へ「帰国」することになった移民の第2世代以降の人々が存在する。日本の身近な例としては、日系人や引揚者の人々があげられる。彼ら彼女らにとって「故郷」とはどこか、「帰」にはどのような含意があるのか、「帰国」してからどのように日常生活を送っているのだろうか。こういった問題群に我々の関心がある。

ところが、「帰還移民」は誰を指すのか、という考察の対象を定めようとする時、大きな問題に直面する。果たして当事者は「帰還」と思っているのか、「新たな移住」と思っているだけではないのか、たまたま定住することになっただけで、「母

国」に定住する気が最初からあったわけではないのではないか、どの時点で「帰還」とするのか、「帰還移民」というのは研究者側の定義づけに過ぎないのではないか、といった疑問を抱き、いったいどのような人を「帰還移民」と見做すのかという問題である。

そこで、「帰還移民」の範疇について考える際、「トランスナショナルな移民」と比較し、それとは一線を画すことを試みた。「トランスナショナル」とは「日常生活が1つ以上の国家に依拠した連続的かつ恒常的な相互関係に依拠していること」（Basch, Glick Schiller, and Blanc Szanton 1995:48）で、そういった空間の広がりの中で「トランスナショナルな移民」とは、2つ以上の地域を頻繁に移動し、同時に経済的・政治的・社会的・文化的関係を築いている人々である。

このような「トランスナショナルな移民」の概念に対し、レイとコバ

ヤシは、トランスナショナルな移動が頻繁化する中で、「帰還移民」という概念そのものが曖昧になっていること、帰国移民の適応は単線的モデルから循環的モデルへと移行していると述べた（Ley and Kobayashi 2005: 4）。しかし、我々は、このように「帰還」現象を「トランスナショナル」な現象と同一線上で考えるのではなく、一線を画して考えた。すなわち、本共同研究における「帰還」は、定住を伴う「帰還」、必ずしも定住を伴わず、頻繁な往復ではなくルーツ探しを目的とした一過性の「帰還」、または第3国への再移住も視野に入れた「帰還」を対象とする。

このような検討から、本共同研究では、移住先国で生まれ育った第2世代以降の移民の「帰還」に注目し、当事者の視点に立ち、「帰還」という現象がどのように捉えられているかを考察し、個人の行動の選択にとって中心的なファクターが何であるのかを検討することを目的とする。

さらに、「帰還」という行為や「帰還」後の生活や文化を考察する場合、移住の目的、「帰還」の理由、祖国の側の対応、祖国と移住先国間の政治的・経済的関係、国際関係上の問題などにより、まったく異なる枠組みが必要となる。この点において、比較民族誌的研究を行うことに意義があり、これにより、多面的地域研究の重要性の提唱が期待できる。

## 「故郷」認識

トランスナショナリズム研究やディアスポラ研究では、国

境を越えたライフスタイルや脱領土的なアイデンティティ、想像上の「故郷」を過度に重視する傾向があった。加えて、祖国が第1の故郷、移住先国が他郷あるいは第2の故郷のように、2項対立的に語る傾向もみられた。また、日系ブラジル人の適応について人類学的視座から考察したツダは、「エスニックな帰還移民は、移民受け入れ国と輩出国の双方につながりをもつトランスナショナルなコミュニティに生きている。しかし、一般的な移民と異なり、国境を越えて結びつくことが、2つのホームランド（エスニックなホームランドと出生のホームランド）の間で構築される」（Tsuda ed. 2009 :9）と述べているが、これも最初から「2つのホームランド（故郷）」を想定しており、双方と均等に結びついていることを前提しており、トランスナショナリズム論の線上から脱していない。

本共同研究では、個人の生活世界、戦略的な生き方の選択、公的史観や筋筋、身体的特徴、移住先で得た文化的要素や人間関係がいかにして「帰還移民」の生活を制限しているか、あるいは利用されているか、といったミクロな視点から実証的に切り込むことにより、移動によって故郷認識がどう変化するのか、どのように「故郷」が「創出」されるのか、または「故郷」は永久に固定されたものなのか、といったことを考察していく。中国残留孤児の日本への引き揚げについて蘭信三が、「単に望郷で祖国に帰国するだけでなく、日中関係の変化、日中両社会の変化、さらにはそのバランスの変化の中で考察する必要がある」と述べている（蘭 2006 : 8）。この指摘は単に故郷を想う気持ちから帰国したのではなく、日本の経済発展を利用し、より良好な生活を求めて戦略的に「帰還」した側面にも目を向けさせてくれる。こうしたマクロな背景にも留意しながら、移民にとっての「故郷」が多様なファクターの中で絶えず意味づけなおされる存在であることを実証的に明らかにしていきたい。

### 「生活世界」の描写

以上のような、「帰還」や「故郷」の概念の再検討のために我々がミクロな視点から切り込むのは、彼ら彼女らの「生活世界」である。ここでいう「生活世界」とは、「帰還」後、彼ら彼女らが日常生活の日々の実践の中でつくり上げてきた文化（食文化、年中行事の実施、宗教、族譜の編纂など）、組織的活動、人間関係のサークルなどを指す。本研究では、トランスナショナリズム研究やディアスポラ研究でしばしば取り上げられてきた国境を跨ぐ生活スタイルやナショナルな領域に限定されないアイデンティティの様相という問題を扱うのではなく、「帰還」後の当事者がつくり上げてきた文化やサークルを詳細に描写していく。

たとえば、本共同研究のメンバーの足立綾は、フランスの「ピエ・ノワール」（「黒い足」を意味する、仏領アルジェリア帰りの引揚者たちを指す俗称。公称は「アルジェリアからの引揚者」を意味する「ラパトリエ・ダルジェリ les rapatriés d'Algérie」）を対象に、彼ら彼女らの組織的な活動についてフィールドワークを行っている。中でも1970年代から、出身地域や出身校、職業を同じくする人々が親睦を深めることを目的としてできた友の会や、各地に離散した「同胞」たちの



文化団体、〈セルクル・アルジェリアニスト〉の機関誌。年3回発行され、仏領アルジェリアの歴史や文芸を紹介している（足立綾撮影）。

連帯をあらためて深めるための文化団体、中でも1920年代のアルジェリアで起こった文芸運動「アルジェリアニズム」を継承しようとする文化団体の活動を追うことで、「ピエ・ノワール」たちが「集団」として可視化していく過程に着眼している。これにより、彼ら彼女らが「フランス市民」と差異化しながら記憶を語り合う日常の一側面といった生活世界に迫っているのである。

加えて、本共同研究のメンバーの比留間洋一は、ヒップホップ音楽の創作活動を通して自己表現を行うあるベトナム難民男性に注目し、その歌詞の分析や彼のライフヒストリーの聞き取りを行うことによって、彼の心の「痛み」に迫る。彼にとって「故郷」のベトナムがどのような存在なのか、「帰還」とは何を意味するのか、といったことを明らかにしようとしている。

### 「帝国」概念の再検討

さらに、本共同研究では、「入植型帰還（colonial return）」移民を対象の1つとすることにより、「帝国」概念に人類学的視座から切り込み、再検討する。従来の帝国史・植民地研究では、本国（中心）／植民地（周辺）、支配者／非支配者のように2項対立的に捉えられてきた。また、当事者のオーラルヒストリーの収集やホスト国への適応過程に議論が集中してきた。これに対し本共同研究では、「帰還移民」個人の生き方の諸相から、数世代に渡る長いスパンで「歴史」や「帝国」の概念を問い直すことを問題提起する。

### 【参考文献】

- 蘭信三 2006 「序言『中国残留孤児』の問いかけ」『アジア遊学 85 中国残留孤児の叫び』 pp.4-11 勉誠出版。
- Ley, David and Audrey Kobayashi 2005. Back to Hong Kong: Return Migration or Transnational Sojourn? *Research on Immigration and Integration in the Metropolis* 5: 1-20.
- Schiller, Nina Glick, Linda Basch and Cristina Szanton Blanc. 1995. From Immigrant to Transmigrant: Theorizing Transnational Migration. *Anthropological Quarterly* 68(1): 48-63.
- Tuda, T. (ed.) 2009. *Diasporic Homecomings: Ethnic Return Migration in Comparative Perspective*. Stanford: Stanford University Press.

### なぐら きょうこ

静岡県立大学国際関係学部専任講師。専門は文化人類学、特に華僑華人研究、華南僑郷研究。著書に、『「故郷」与「他郷」——広東帰僑の多元社区、文化適応』（北京社会科学出版社 2010年）、『中国系移民の故郷認識：帰還体験をフィールドワーク』（風響社ブックレット 2011年）、『帰国華僑』（風響社 2012年）がある。